

1920年代の軽演劇における ダンサーに関する一考案

杉山千鶴

I. 研究目的

1920年代の浅草は大衆文化の坩堝¹⁾であったが、中でも軽演劇(浅草オペラ→映画館のアトラクション→浅草レビューという変遷を辿る)は、活動写真に次ぐ観客数を集めた。軽演劇では常に舞踊が上演され²⁾、後に日本のモダンダンスのパイオニアとなる石井漠、高田雅夫・せい子等を輩出している。本研究は、1920年代当時はモダンダンスの草創期以前であったことに着眼し、当時の軽演劇のダンサーに関し、特に不良少年の発生源と見做された女性ダンサーについて考察するものである。尚、本研究は海野弘に従い、1920年代を1918(大7)年~1932(昭7)年とした³⁾。

II. 研究方法

1920年代当時の浅草や軽演劇に関する文献・資料(新聞・雑誌)及び関係者の自伝・伝記等から俳優・女優に関する文や単語を人物別に抽出、更に舞踊に関する語を有する女優を対象とした。

III. 結果及び考察

浅草オペラでは、抽出された女優61名中考察対象となったのは24名、映画館のアトラクションでは5名中2名、浅草レビューでは14名中7名であった。

(1) 浅草オペラ

浅草オペラの初期はオペラ女優は、帝劇歌劇部やローヤル館或いは欧米で舞踊の修養を積んだが、浅草以来の参加者は歌・舞踊・演技を兼任し、更に速成急造で舞台に乗った為に、まともな舞踊を見せられる者は非常に少なかった。そして西洋の舞踊を芸術の一分野として紹介する初期の段階から、刺激的・官能的な部分を強調しエロチシズムの担い手へとダンサーは変容する。

○高木徳子…天分と高度な技術の所有は認められていたが、女体の曲線美を露顕しエロチシズムを強烈に見せつけるとも見做された。即ちそれだけ西洋の舞踊が、大衆にとって刺激的・官能的だったのである。

○沢モリノ…小柄で可憐な容姿に、観客が快感を覚える程軽快な舞台振り。日本一のダンサーとの評価が多い。

○原せい子…夫・高田雅夫と組み、本格的な舞踊を見せた。

○河合澄子…舞踊は未熟な代わりに刺激と官能を前面に出した舞台振りで支持を得た。当時浅草に来街した大衆のニーズに合致したため⁴⁾集客したという点で、浅草オペラ降盛の貢献者と言える。

(2) 映画館のアトラクション

対象女優の他、当時の上映案内を見ると浅草オペラ残党の名が窺われる。

○河合澄子…浅草オペラ同様の舞踊だった。

(3) 浅草レビュー

レビューガールは、歌・舞踊・演技を分担したので集中的に訓練を受け、また運動量が多い上に拘束時間が長かったので、オペラ女優と異なり子供の様な体型をし、年齢も体力上若い者が多かった。従って個人ではなく、露出度の高い衣裳を付けた集団となって初めて刺激と官能が発散され、また躍動的な舞踊が爽快感を与えたと考えられる。

○梅園龍子…小柄で華奢な身体つき。カジノ・フォーリーの誇るダンサーだった。

○望月美恵子…ジャズダンスの天分は高く評価され、梅園と共に舞踊のスターと考えられる。

○河合澄子…浅草オペラ以来の路線の舞踊で、エロの自家本元を自称、開き直っていた。

(4) 1920年代の軽演劇におけるダンサー

浅草オペラの初期には、各歌劇団の首脳部に舞踊に秀でた者が居たが、浅草からの参加者は速成急造による未熟さを刺激と官能でフォローした。一方大衆は西洋の舞踊を浅草オペラのダンサーから紹介され、その刺激性・官能性を認識、この時点で舞踊の芸術性は軽視されたのである。浅草レビューに至るとダンサーは、浅草オペラとは正反対で無邪気に踊ったが、大衆にとっては両者は同じ身体露出舞踊であり、ただレビューガールは一瞬でも爽快感を覚えさせてくれる存在だった。

従って1920年代の軽演劇においてダンサーは、西洋文化の一つである舞踊を大衆に紹介、更に刺激・官能の二要素を強調して大衆を喚び、軽演劇降盛の一因となったのである。即ち大衆は芸術としてではなく視覚的娯楽として舞踊を認識したのであり、また不況下に精神的解放・現実逃避をさせてくれる瞬間を舞踊に見出したのである。

- 1) 今和次郎「新版大東京案内」批評社1933, P.117
- 2) 杉山千鶴「1920年代の軽演劇における舞踊の特性」お茶の水女子大学人文科学紀要第44巻1991, P.253
- 3) 海野「モダン都市東京」中央公論社1983, P.11
- 4) 杉山「浅草オペラから浅草レビューへの変遷」お茶の水女子大学人文科学紀要第43巻1990, P.189